

ソシオメトリック・ステイタスの低い児童の 人格的・行動的特性について

宮 脇 修

On the Personality and Behavior Traits of Low Sociometric Status Children

Osamu MIYAWAKI

はじめに

ソシオメトリック・テストを行うと、学級集団の中で多くの成員から positive nominate されて、いわゆる学級のリーダーとして活躍する子どもがいる。その反面、negative nomination の多い、いわば学級内の社会的不適応児のいることも事実である。

今回の研究は、こうした、クラスの中で成員から排斥されがちで、ともすると rejectee になってしまっている児童の人格的・行動的特性に注目してみた。

いわゆるこのタイプの社会的不適応児は、誰からも positive にも negative にも指名されない非社会的児童とは異なり、いわば反社会的行動ゆえに排斥されて rejectee の存在になってしまっているのである。

実は、この類の問題児を学級指導の中でどう処遇するかは、学級担任の学級経営上重要な意義をもつものである。この指導は究極的には case by case で、ひとりひとりの個性を理解するところから始まるものであるが、かりに、こうした類の児童の人格的・行動的特性といったものが判明してくれば、case-study をより科学的に行う参考の資となるであろう。

本研究も、このような意図のもとで、case-study にある方向性を示唆するものとして、Rosenzweig の Frustration theory¹⁾ (精神力動への接近をもっとも適切かつ縮図的に示すのは欲求不満の諸現象であるという主張) をベースに、ひとつの考察を試みた。

方 法

1 Low sociometric status group の選出

まず、Low sociometric status group の児童を抽出するに当たって、ソシオメトリック・テストを行った。小学校 4・5・6 年 (各学年 3 学級) 計 9 学級で、1 学期と 2 学期に 6 か月の期間をおいて 2 回実施し、ソシオメトリックスの上で CRS が -10 以上の児童を抽出した。

そして、その中で学級担任も“rejectee”と判断した児童を、各級 1 乃至 2 名選び、計 15 名を対象児とした。

なお、比較検討を行うため、CRS が +10 以上で、Isss の高いいわゆるスター的存在で、学級担任もそのように判断している児童を、Low sociometric status group と同じ要領で計 15 名を選んだ。これを High sociometric status group とした。(なお、この High sociometric status

groupの児童たちは、純粹ソシオメトリーの手順をとっていないので、厳密にリーダーとは言い難く、²⁾ スターとして解釈していく。またソシオメトリック・テストのクライテリオンは、H・H・Jenningsが区別するpsyche-criteriaとsocio-criteriaを併用し、“給食のとき誰と一諸に食べたいか”というアイテムで、ソシオメトリック・テストを行った)

2 データーの収集

先述したように、人格的・行動的特性について考察をすすめるためには、質・量ともに多面的なデーターを必要とする。したがって、case-studyや臨床観察などの方法によって縦断的なデーターの積み上げが望まれる。本研究は、緒についた段階であるので、とりあえずsemi-projective technique³⁾といわれるPF-STUDY(Picture Frustration Study)を試行し、テスト・バッテリーとして、CCP(A test for measuring children's cognition of parents)を行ってみた。

PF-STUDYは、“欲求不満への反応評価のための絵画連想研究”と呼ばれ、semi-projective techniqueである点から刺激図も曖昧化されているが、場面的決定因(situational determinants)は明細化され制限投影法の形をとっているものである。

CCPは、親に対する子どもの認知像を調べるもので、projective techniqueではない。

この二つの検査を通して、High sociometric status group(以下H groupと呼ぶ)との比較の上で、Low sociometric status group(以下L groupと呼ぶ)の人格的・行動的特性を見い出そうとする。

なお、テスターは、学級経営の立場からもラポールの点からも、一切の検査は、学級担任がこれに当たった。PF-STUDYは日本版三京房刊行のものを、CCPは牧野書房刊行のものを使用した。

結果の考察

1 PF-STUDYの結果から

(1) PF-STUDYについて

PF-STUDYでは、日常的場面の24の刺激図があり、その刺激図には二人の人物が描かれて

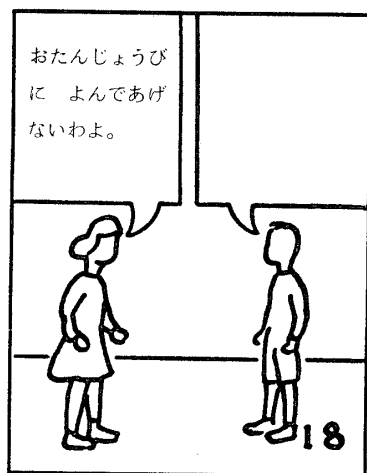


図1

ている。(図1)ここで、frustrater(あるいはfrustration agent)がfrustrateeに何らかの原因でフラストレーションをひきおこさせる。このときフラストレーションの反応語を評点整理する方法で、欲求不満のメカニズムを知る。その反応語には、

- a) 自己批判的検査の加わった意見水準 (opinion level)
 - b) 現実生活場面での実際にとる外見的・明示的水準 (explicit level)
 - c) 性格の原型を反映する含蓄的水準 (implicit level)
- の三種が考えられている。⁴⁾

また、評点因子には、表1に見られるように11の因子が設定されている。⁵⁾ 整理の方法は、①GCR(Group Conformity Rating) ②プロフィール ③超自我因子 ④反応転移分析等のカテゴリーに分かれている。

これらによって、被験者の一般的適応性・情緒・判断・欲求・防衛メカニズム・リビドー

表1 評点因子の一覧（攻撃の方向と型）

		攻撃の型又は段階 Tapes or stages of aggression		
攻 撃 の 方 向	型	障害優位度 (O-D) obstacle-dominance	自己防禦型 (E-D) ego-defence	要求固執型 (N-P) need-persistence
	攻 撃 の 方 向 D i r e c t i o n s o f a g g r e s s i o n	外 罰 的 (E) e x t r a p u n i t i v e n e s s	E' (外罰方向障害優位型の反応) 欲求不満を起こさせた障害を強く指摘, 表明するもの	E (外罰方向自己防禦型の反応) とがめ, 敵意を外に向け自我を強調する (超自我因子) E 負わされた罪に責任ある事を攻撃的に否認
内 罰 的 (I) i n t r o p u n i t i v e n e s s		I' (内罰方向障害優位型の反応) 欲求不満を起こさせた障害の指摘は内にむけられる	I (内罰方向自己防禦型の反応) とがめ, 非難が自分に向けられ, 自責, 自己非難の形をとる (超自我因子) I 一応自分の罰は認めるが多く言い訳の形をとる	i (内罰方向要求固執型の反応) 解決をはかるために自分自ら努力したり, 罰の意識から罰滅ぼしを申し出たりする
無 罰 的 (M) i m p u n i t i v e n e s s		M' (無罰方向障害優位型の反応) 欲求不満を起こさせた障害の指摘は最小限にとどめられ内にも外にも攻撃を向けない	M (無罰方向自己防禦型の反応) 欲求不満をひき起こした事に対する非難を全く回避しあるときには不可避なこととし欲求不満をおこさせた人物も許す	m (無罰方向要求固執型の反応) 時の経過に問題の解決をゆだねる反応で忍耐するとか規則習慣に従うとかの形をとる

の型などの考察に示唆を与える。

(2) GCR の考察

GCR とは, “日常生活で普通おこりがちな欲求不満場面では, 必ず世間の常識になっているような適応の仕方があるが, 個々の被験者がどの程度この常識的な順応の仕方を示すかを調べる指標”⁶⁾ としているものである。

ひらたく言えば, どの程度世間並みの適応をしているかの指標が GCR と言ってもよい。

したがって, 個々の児童の GCR% を標準 (ここでは Norm reference) % と比較することによって, この児童が, 日常的によくおこりがちな欲求不満事態に当たって, 常識的な適応の仕方を示すかどうか判定されることになる。

標準より著しい偏差% を示す児童は, 何らかの意味でフラストレーション事態での反応が異常であることが推察される。但し PF-STUDY では, GCR が低いからといって, それだけで不適応状況を推論することを慎まねばならない。

表2で, L group と H group の GCR を比べてみると, L group の方に GCR% が -2σ 以下を示す児童 (Z・K, Y・M) が散見されるも, 両者の間には有意差を認めることはなかった。

表2 PF-STUDY の GCR ならびに攻撃の方向・型の%

High sociometric status group								Low sociometric status group							
	GCR%	O-D	E-D	N-P	E	I	M		GCR%	O-D	E-D	N-P	E	I	M
Y.H	54	15	63	23	63	25	13	Y.O	55	12	38	50	36	36	29
H.W	67	13	46	42	25	40	35	K.N	59	25	52	23	52	25	23
K.K	41	11	63	26	28	46	21	Y.K	63	20	48	37	37	39	24
K.K	59	24	48	28	37	26	37	H.O	67	15	63	23	65	15	21
A.M	68	13	61	26	39	22	39	M.W	63	23	58	19	35	44	21
S.N	63	19	54	27	52	17	31	A.T	67	17	54	21	73	17	10
K.H	54	15	48	38	52	25	23	Z.K	25	40	56	4	63	21	17
T.I	50	15	65	20	52	27	21	K.H	63	15	69	17	48	31	21
M.N	54	6	58	36	61	23	17	Y.H	54	25	46	29	48	33	19
I.S	42	19	48	33	65	31	4	S.S	64	15	59	26	46	22	33
Y.K	46	15	54	31	31	40	29	M.T	71	22	65	13	30	30	40
M.K	54	13	70	17	54	20	26	H.Y	79	21	63	17	33	21	46
T.G	67	13	61	27	27	35	38	Y.M	29	28	46	26	76	11	15
T.W	71	10	58	32	46	27	27	K.N	83	13	76	11	43	30	27
A.I	54	13	63	25	50	17	33	S.A	42	26	48	26	46	24	33

H group > L group O-D 0.0042 ** E 0.7096 * P < 0.05
 E-D 0.6528 I 0.6384 ** P < 0.01
 N-P 0.0332 * M 0.6100

Low sociometric status group と High sociometric status group との有意差検定はすべて nonparametric method の U (Mann-Whitney) test もしくは T test で行った。

$$U_1 = n_1 n_2 + \{n_1(n_1+1)/2\} - R_1 \quad U_2 = n_1 n_2 + \{n_2(n_2+1)/2\} - R_2$$

から、近似法により $CR = \frac{U-E(U)}{\sqrt{Var(U)}}$ によった。なお結び (tie) が多かったので Var の値を

$$Var = \left(\frac{n_1 n_2}{N(N-1)} \right) \left(\frac{N^3 - N}{12} - T \right) \quad N = n_1 + n_2 \quad T = \sum_{j=1}^s (t_j^3 - t_j) / 12 \text{ で求めた。}$$

(3) 評点因子プロフィールの考察

評点因子については、攻撃の方向と型の両面から考察をすすめてみよう。

(i) 攻撃の方向 (Directions of aggression)

筆者が以前に、同じような条件で小学生高学年児童を調べたとき、L group で、E%, I%, M% の割合が \neg 型になった者が 8/25、 $E \begin{matrix} \nearrow \\ M \end{matrix}$ と山のぼり型の者が 7/25 いた。今回も M% の割合が L group の方に多いのではないかと予想していたが、二つの group 間に有意差を見つけることはできなかった。

(ii) 攻撃の型 (Types or stages of aggression)

三つの型、O-D (Obstacle-Dominance), N-P (Need-Persistence), E-D (Ego-Defence) の各%を両群比較してみると、O-D型 (1%有意水準) と N-P型 (5%有意水準) で有意差を確認し、いずれも H group が高い%を示した。

O-D型とは、欲求不満に対する自我の活動反応の卒直な表明を避ける制止した反応型であ

る。この場合、制止の仕方が E', I', M' のいずれを強調しているかによって、外罰方向障害優位、内罰方向障害優位、無罰方向障害優位の三つの型がきまってくる。

この内容分析を行ってみると、E' 反応(欲求不満をおこした事に対する失望とそれに伴う不満を外に向ける反応……外罪方向障害優位)において、L group と H group の間にはっきりした差(1%有意水準)が見られ、L group が高い頻度を示した。E' 反応が標準より著しく高く出る場合は、“欲求不満に遭遇したとき、単なる不平や失望に終始し、問題の解決に向かうことの手先の児童である”と、PF-STUDY では解釈する。

また、N-P 型とは、欲求不満事態においてストレス解消を発展し建設的な解決をはかるため要求を固執する反応型である。

N-P 型では、H group が L group よりもその反応頻度が高く、欲求不満事態に際しての耐性の高さを示しているように思われる。特に、その内容分析において、e, i, m% の状況を調べてみると、H group は i % において L group をしのいでいる。i 反応因子とは、“欲求不満を解消するために自己内省をもとにして問題解決に向かう反応”である。

以上を総合すると、L group の児童は H group の児童に比べ、欲求不満事態に際して外罰的方向に傾きやすく、ストレス解消に当たって単なる不平不満に終始し、問題解決への内省的構えに弱い傾向がある。

(4) 反応転移分析について

この反応転移分析では、被験者のテストに対する心構え、心理構造などを吟味する。

PF-STUDY の解釈上の注意として“場面 1 から 24 に至る間に、場面のもつ性質の違いからその反応後には多少の相違が出てくる。しかし、一定の心構えで反応すれば、テストの前半まで強く外罰反応を出していたが、途中でふとこんな反応ばかりすれば変な人と思われやしないか等と、被験者が考えた場合には、当然それ以後、内罰或は無罰の反応をするようになる”⁷⁾と述べているように、被験者の心理的变化によってその反応の質が転移していく。

これまでの PF-STUDY の研究によれば、家庭環境に問題があったり、生活環境に歪があったりすると、その心のわだかまりが反映して反応転移を生じやすく、特に人間関係に不全感をいだく者には転移があらわれやすいとされている。

また、同一人物でも、心理安定がすすむにつれ、“欲求不満耐性 (frustration tolerance) が高まってくるので、それに伴ない反応の流れにムラや乱れが少なくなってくる”⁸⁾と、一谷等は述べている。

このような解釈のもとに表 3 の反応転移分析のもようを眺めてみよう。

H group と L group の転移メモを一瞥しただけで、L group が多いことを感じる。転移した者について見ても、L group は全員で頻度も高い。特に、N-P 欄において H group では皆無であり、L group では 6 名反応転移を試みている点が印象的である。

反応転移に関して考察してみると、概して L group は H group に比べ心理的安定度が低いもようであり、ある種の不全感をもちやすい傾向があるといえよう。

2 CCP の結果から

(1) CCP について

CCP とは、“親に対する子どもの認知像の検査法” (test for measuring Children's Cognition of Parents) の略称である。

およそ親子関係を調べるには、①第三者から情報を得る方法 ②親から直接情報を得る方法 ③子どもから直接情報を得る方法の三つが考えられる。したがって、本来的にはこの三

表3 PF-STUDY 反応転移分析

High sociometric status group					Low sociometric status group						
Name	E'I'M'	EIM	eim	$\frac{E'+E+e}{I'+I+i}$ $\frac{E'I}{M'+M+m}$	$\frac{E'+I'+M'}{E+E+I+L+M}$ $\frac{e+i+m}{e+i+m}$	Name	E'I'M'	EIM	eim	$\frac{E'+E+e}{I'+I+i}$ $\frac{E'I}{M'+M+m}$	$\frac{E'+I'+M'}{E+E+I+L+M}$ $\frac{e+i+m}{e+i+m}$
Y. H ♂		$E \leftarrow$ +0.36		$\rightarrow I$ -0.33	$N \rightarrow P$ 0.44	Y. O ♂		$E \rightarrow$ +0.5	$e \rightarrow$ +0.66	$E \rightarrow$ +0.46	$M \rightarrow$ -0.33
H. W ♂		$E \rightarrow$ +0.5	$M \rightarrow$ -0.6			K. N ♀	$E' \rightarrow$ +0.33		$i \rightarrow$ +0.62	$m \rightarrow$ -0.6	
K. K ♀		$I \rightarrow$ +0.65		$\rightarrow I$ -0.34	$N \rightarrow P$ -0.5	Y. K ♂		$I \rightarrow$ +0.5			$M \rightarrow$ -0.8
A. M ♀						H. O ♂				$I \rightarrow$ +0.71	
S. N ♂				$\rightarrow M$ -0.33		M. W ♂				$E \rightarrow$ +0.65	$M \rightarrow$ -0.8
K. H ♀		$\rightarrow I$ -0.55		$M \rightarrow$ -0.42		A. T ♂		$E \rightarrow$ -0.63	$e \rightarrow$ -0.75		$E \rightarrow D$ +0.33
T. I ♂						Z. K ♂	$E' \rightarrow$ +0.5			$E \rightarrow$ +0.37	$I \rightarrow$ -0.75
M. N ♀						K. H ♀		$I \rightarrow$ +0.33			$M \rightarrow$ -0.62
I. S ♀		$\rightarrow I$ -0.5		$\rightarrow I$ -0.5	$O \rightarrow D$ -0.5	S. S ♂			$M \rightarrow$ -0.6		$M \rightarrow$ -0.6
Y. K ♂						M. T ♀		$I \rightarrow$ +0.33		$m \rightarrow$ -0.33	
M. K ♂		$M \rightarrow$ -0.5		$I \rightarrow$ +0.33	$M \rightarrow$ -0.5	H. Y ♂		$E \rightarrow$ +0.23			$N \rightarrow P$ -0.5
T. G ♂		$E \rightarrow$ +0.33		$E \rightarrow$ +0.38	$M \rightarrow$ -0.33	Y. M ♂			$\rightarrow e$ -0.64		$N \rightarrow P$ -0.75
T. W ♂		$I \rightarrow$ +0.55				K. N ♂			$M \rightarrow$ -0.6		$M \rightarrow$ -0.33
A. I ♀					$E \rightarrow D$ +0.36	$N \rightarrow P$ -0.35	S. A ♂	$\rightarrow I$ -0.33		$e \rightarrow$ -0.33	$N \rightarrow P$ +0.42
K. K ♂				$I \rightarrow$ +0.33		Y. H ♀		$I \rightarrow$ -0.5	$E \rightarrow$ -0.5		$M \rightarrow$ -0.55
										$E \rightarrow D$ +0.44	$N \rightarrow P$ +0.42
										$O \rightarrow D$ +0.33	

つの方法を総合して親子関係を知ることがもっとも確かな情報を得ることになる。しかしながら、子どもの指導に関して役立つ情報というものは、第三者が眺める客観的な親子像よりも、当の子どもが親をどう眺めているのか……その認知像が重要だと考えられる。

たとえば、父親が子どもの将来を思って愛情を内に潜ませつつ厳しく対処しているとしよう。

そのことが第三者にも解るとしても、当の子どもがそれを理解し得ないで親を拒否的に受けとめているとすれば、子どもの行為は“自分は父親に嫌われている”という感情が土台となって展開していく。

CCP が把えようとしているのは、まさに“子どもが認知している現実の親の姿”⁹⁾なのである。そして、これが子どもの行動を強く規定していると考えている。

CCP には、PF-STUDY と同じように、24 の刺激図(父に関して12, 母に関して12)が用意されている。ただ、CCP ではPF-STUDY のように投影的水準の反応を求めるのではなく、現実水準に立脚し日常的親子の生活場面を刺激図として取りあげ、それを図2のようにハーフトーン形式で描いている。ハーフトーンに描写した理由は、¹⁰⁾ 次の三

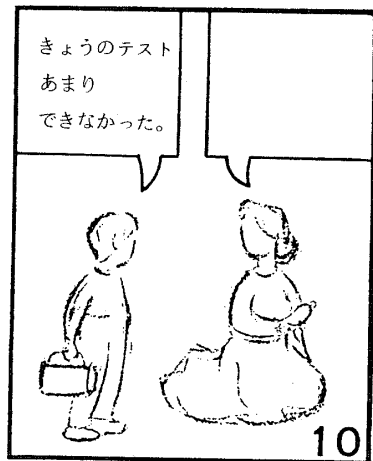


図2

表4 CCPの評点因子

	定義 (子どもの認知)	内 容		定義 (子どもの認知)	内 容
拒	D	欲求を受入れず思い通りに強力に働きかけるが情緒的には拒否しない。	受	C	瞬間的には不満をひき起さない程度に統制を加えて欲求を受入れ、情緒的にも受容している。
	D'	ただちに、欲求を満たさず都合のよいように支配して欲求の充足を遅延させている。		C'	欲求に対して一応の関心を示すが、ただちに具体的には欲求を満たさない。
否	R	欲求を受入れず、情緒的にも拒否したり、非難・嘲笑・攻撃したりする。	容	S	なんら統制を加えず、欲求をそのまま受入れ、情緒的にも受容している。
	I	欲求に無関心で欲求を満たさず放置する。		ΣA	・服従 ・盲従
ΣR	I	欲求に無関心で欲求を満たさず放置する。	そ の 他	P	Perplexiy
	I'	欲求を満たさず、言いのがれたり責任を回避したり、他者へ転嫁したりする。		NE	No-Experience
				NR	No-Response
				E	Error

つである。

- ④親子の接触が行われる日常の生活場面の決定因子を明確化するため。(質問紙法ではこれが明確化されにくく、子どもから現実的な反応が得にくくなることが予想される)
- ⑤場面の決定因子を明確化しながら、他方では提示された絵は、できるだけ曖昧さに富ませる。描かれている人物の顔の表情や具体的な動作・行動などについては、被験者が過去の体験や印象からどのようにでも考えられるようにするため。
- ⑥言葉だけでは極めて概念的・抽象的となる。絵を用いることにより防衛的機制が働くのをできるだけ阻止するため。

CCPでは、各刺激図の反応語を表4の評定因子の定義にしたがって評点化し、解釈・診断する。診断に際しては、⑦反応語の吟味 ⑧集団規準との比較・対照 ⑨推測的説明段階への接近……心理学的説明論の対応 ⑩質問の必要性などが強調される。¹¹⁾その上で、全場面プロフィール、場面別評点等の解釈、特殊因子評点解釈、母親と父親のパターン比較などを行う。

(2) 全場面プロフィールの考察

解釈の順序として、まず全場面プロフィールについて両群の比較・対照を行ってみよう。

全場面プロフィールで注目すべきは、子どもが自分の親を“自分の欲求を受容する親”としてか“拒否する親”としてか……いずれの方に認知しているかの要件である。

この場合、受容とか拒否とかは、“子どもの欲求を充足するもの=受容”“子どもの欲求を充足しないもの=拒否”という形で評点化してある。なお、欲求の受容(Acceptance of needs)でも、表4で示しているように、C、C'、S等と分類し、拒否(Rejection of needs)についても、D、D'、R、I、I'等に分類している。

したがって、ΣA、ΣRで示される受容・拒否の一般的傾向だけでなく、評点記号の内容を分析し、同じ受容でもいろいろな受容の仕方があり、そのうちどちらに傾いているかを知ることが重要である。

表5 CCP $\Sigma R \cdot \Sigma A$ 評点

High-group

Low-group

	Name	NE	R			ΣR	A		ΣA	D'	C'	I'	Name	NE	R			ΣR	A		ΣA	D'	C'	I'
			D	R	I		C	S							C	S	D		R	I				
母親への認知	S. N		3			3	6	3	9	2	5		Z. K											
	K. K	1	3			3	7	1	8	1	4		Y. H	2	4		1	5	3	2	5	2	1	
	Y. H	1	7	1		8	2	1	3		2		K. H	1	5			5	4	2	6		4	
	H. W	2	5			5	4	1	5	1	2		S. S	2	3	1		4	5	1	6	1.5	1	
	K. K	2	2.5	1		3.5	5.5	1	6.5		2.5		A. T	2	2	1	1	4	5		5			1
	A. M	7	1.5			1.5	1.5	2	3.5	0.5	1		Y. K	2	5	1	1	7	2	1	3	2	1	1
	I. S		4		1	5	5	2	7	1	3		H. O	2	4.5			4.5	2.5	3	5.5	1	2	
	K. H		3.5			3.5	4.5	4	8.5	0.5	3.5		M. W	1	3.5	1		4.5	4.5	1	5.5		2	
	M. N	1	2.5	2		4.5	5.5	1	6.5		3.5		Y. O	3	3		1	4	2	3	5	1	1	1
	T. I	2	3.5			3.5	4.5	2	6.5	1	3.5		K. N	E=2	4	3.5		3.5	2.5		2.5		2.5	
	Y. K	2	2.5		0.5	4	4	2	6	1.5	2	0.5	H. Y	1	5.5			5.5	4	1.5	5.5	2	2	
	T. W	2	3.5			3.5	4	2.5	6.5	0.5	1		K. N		2.5			2.5	8	1.5	9.5		4	
	T. G	1	6			6	5		5		3		Y. M	NR	3	3		3	5		5	1	2	
	M. K	1	2.5			2.5	4.5	4	8.5		1.5	0.5	S. A		3	2	1	6	6		6		5	1
A. I	1	3.5			3.5	6	1.5	7.5	2	5		M. T	NR	1	3.5	1		4.5	3.5	3	6.6		0.5	

☆母親 H>L ΣA 0.3422 ΣA 0.0500* ΣR の C 0.8920 $\Sigma A - \Sigma R$ 0.0066**

High-group

Low-group

	Name	NE	R			ΣR	A		ΣA	D'	C'	I'	Name	NE	R			ΣA	A		ΣA	D'	C'	I'	
			D	R	I		C	S							C	S	D		R	I					C
父親への認知	S. N		3	3	1	7	3	1	4			1	Z. K												
	K. K		5	2	2	9	2	1	3		1		Y. H	E1	4		2	4	6	1		1		1	2
	Y. H		4	1		5	6	1	7		4		K. H	1	1		3	4	4	3	7		4	2	
	H. W	7	2.5			2.5	1	1.5	2.5	1			S. S	4	3	1.5		4.5	3	1	4	2	2		
	K. K	NR1	2	3	1		4	4	1	5		1	A. T	4	1	4	1	6	1	1	2		1		
	A. M	11					4		1		1		Y. K	3	2	2	1	5	4		4	1	4	1	
	I. S		3		1	4	4	3	7	1	2		H. O	1	4.5	1		5.5	4.5	2	6.5	1	4		
	K. H	1	2	1	2	5	4	1	5		4		M. W	1	3	2	1	6	3	1	4				
	M. N	1	4			4	6	1	7		5		Y. O	2	2	1	1	4	6		6				
	T. I	5	1	1		2	3	2	5		3		K. N	NR2	E1	2		3	5	1		1	1		
	Y. K	1	4	1		5	3	3	6	1	2.5		H. Y	2	3			3	5	2	7	1			
	T. W	2	1		2	3	4	3	7	1	1	2	K. N		2			2	5	4	9	2	3		
	T. G	3	4	1		5	4		4	1	3		T. M												
	M. K	2	4			4	2	3	5		1		S. A	6	1	1		2	2	2	4		2		
A. I		2.5		1	3.5	3	5	6	1	3		M. T	1	2			2	2	7	9					

☆父親 H>L ΣR 0.0718 ΣA 0.4716 ΣR の C 0.9442 $\Sigma A - \Sigma R$ 0.8340

Hgroup 父>母 0.3734 (ΣR) Lgroup 父>母 0.5686 (ΣR)
 父<母 0.0404 (ΣA)* 父<母 0.7040 (ΣA)

ここでは、H group と L group の比較を ΣA と ΣR に視点を当て検討する。
 表5 から、次のことが導き出せる。

表6 CCPにおける“受容”の評点因子を救助・親和・独立の三場面にならべたもの

High group		Low group						
母親への認知		救助	親和	独立		救助	親和	独立
	S.N	C' C' C' S	C'	C' C S	Z.K			
	K.K	C C' S	C C' C	C C	Y.M	C	C'	S S
	Y.H	C'	C' S		K.M	C'	C' S	C' C' S
	H.W		C C'	C' C S	S.S	C C	S	C C' C
	K.K	C' C' C	C S	C' C'	A.T	C C C	C	C
	A.M	C'	C		Y.K	C	S	C'
	I.S	C' C'	C' C	C S	M.O	C' S	C' / S	C S
	K.H	C C' S	C' C' S	C S S	M.W	/C' C	C	C' C S
	M.N	C C'	C' S	C' C'	Y.O	C	S S	C' S
	T.I	C' C C'		C' C' S	K.N	C' / C'	C'	
	Y.K	C	S S	C C' C'	H.Y		S	C C' C
	T.W	C	C' C S	C S	K.N	C' C' C	C' C S /	C C C' S
	T.G		C' C' C'	C C	T.M	C	C' C'	C C
M.K	C' C	/C S S S	C C S	S.A	C' C'	C' C'	C C'	
A.I	C' C C'	C' S / S	C' C	M.T	C C S	S S	C / C'	

High group		Low group						
父親への認知		救助	親和	独立		救助	親和	独立
	S.N	C S	C C'	S	Z.K			
	K.K		C' S	S	Y.M		C'	C' S
	Y.H	C' C	C C' S	C' C'	K.M	C' C'	C' S S	C C'
	H.W	/S	C S		S.S	C'	S	
	K.K	S C	C' C	C	A.T	C'		C'
	A.M	C'			Y.K	C C' C'		C' S
	I.S	C' C S S	C' S	C	M.O	C' / C	C'	C C
	K.H	C' C'	C' S	C'	M.W	C S	C	C'
	M.N	C' C'	C' C'	C' C	Y.O	C C C'	C' C	
	T.I	C' C'	S S	C'	K.N	C'		C C' C'
	Y.K	S C / S	C C' S S	C S	H.Y	C'	C' S S	C C' S
	T.W	C	C' S S	C'	K.N	C C' S	C' S S	
	T.G		C C' C'	C S S	T.M			S S
M.K		C' S		S.A		C'		
A.I	C' C' S	C' S	S S	M.T	C	S S S S	C S	

- (i) ΣR , ΣA の値を CCP の集団規準 (Norm reference) に照らしてみると、両群ともに $\Sigma R < \Sigma A$ の傾向を示している。
- (ii) 父親認知像には認められなかったが、母親認知像では $\Sigma A - \Sigma R$ の値で、H group > L group (1%有意水準) の有意差が認められた。
- (iii) さらに、母親認知の ΣR , ΣA の二側面について両群の対比を試みると、 ΣA 値で H group > L group (5%有意水準) となった。但し、受容内の C, C', S など各評定因子については有意な差を見なかった。父親認知については両群間に何等の差を認めなかった。
- (iv) 父親と母親とでは、どちらが受容的あるいは拒否的認知されているかについて吟味してみた。H group では、受容的認知に関して、母 > 父 (5%有意水準) という結果をみた。拒否的認知では有意差なし、L group では受容・拒否の両側面において父と母の間に差を見るというよりは、近似した状況であった。

これらを総合してみると、H group の子どもは、L group の子どもに比べて、母親を受容的存在として認知し、家庭では父よりも母への情緒的接触を常に保っているという生活感情を、持ちあわせていると考えられる。

(3) 場面別評点の考察

上述したような H group の子どもの受容的母親像は、CCP における独立・救助・親和のどの場面でも同じように見られるのかを調べると、表6のような結果となった。

母親の親和場面で L group と比べ、H group にあきらかな頻度の高さを見ることができ

表7 CCPにおける“拒否”認知スコアを救助・親和・独立の三場面に整理したもの
High group Low group

項 氏名	High group						Low group						
	救 母	助 父	親 母	和 父	独 母	立 父	項 氏名	救 母	助 父	親 母	和 父	独 母	立 父
S.N		2	2	2	1	3	Z.K						
K.K	1	4	1	2	1	3	Y.H	3	2	2	1		1
Y.H	3	2	2	1	3	2	K.M	3	2	2	1		1
H.W	3	1.5	1	1	1		S.S	1	1	2	2.5	1	1
K.K	0.5	2	2	2			A.T	1		2	1	1	2
A.M	1		0.5				Y.K	3	1	3	3	1	1
I.S	2		1	1	2	3	M.O	2	2.5	1.5	2	1	1
K.H	1.5	2	1	2	1	1	M.W	2.5	1	2	3		2
M.N	2.5	2	1	1	1		Y.O	3	1	1	2		1
T.I	1	1	2	1	0.5		K.N	2.5	1	1	2		2
Y.K	3	2	1	1		2	H.Y	3	2	2.5	1		1
T.W	1.5	2	1		1		K.N	1		1.5	1		1
T.G	4	3	1	1	1	1	T.M	2				1	
M.K	1.5	4	1				S.A	2		2	1	2	1
A.I	1		1.5	2.5	1	1	M.T	1	1	2		2.5	1

父親認知で救助場面……H group > L group (P < 0.01)

母親認知で親和場面……H group > L group (P < 0.01)

る。このことは父親についても言える。親和場面とは、親との情緒的接触を求める欲求に関する場面である。この場面での頻度の高さは“うちの親は、自分と情緒的接触を保っていてくれる”という安心感につながっていくことになる。

観点を別にして、拒否的認知に関し、場面別救助・独立・親和の評点を整理してみると、表7のようになった。全場面プロフィールでのΣRでは両群間に有意差を見つけることはできなかったが、父親認知に関して、救助場面(依存・庇護の欲求)で、H group > L group (1%有意水準)となった。このことは、H groupの父親はL groupの父親に比べ、子どもの依存の態度に対しそれを拒むという接し方をしていると考えられることができる。

また、母親に対する認知でも、親和場面でL groupの母親はH groupに比べ接触を拒否する(1%有意水準)親として認知されている。

要 約

PF-STUDY, CCPのデータをもとにして、Low sociometric status groupをHigh sociometric status groupに対比して、その人格的・行動的特性をまとめると、次の三つに要約される。

1. L groupはH groupに比べ、一般的にフラストレーション耐性が低く、H groupがフラストレーション事態でも、その問題解決に当たって内省的努力の構えで対するのに対し、L groupはフラストレーションを惹きおこした事物・人物に向けて単なる不平不満の感情で終始する傾向がある。

2. L groupは、H groupに比べ、母親に対して情緒的接触の薄さを感じ、全体的に受容的母親像を持ちにくい傾向がみられる。

3. また、父親像に関しても、H groupでは子どもの依存性を排除し独立への希求を持つ親として扱われているのに対し、L groupではその点が弱い傾向にある。

尚、この研究を通して、フラストレーション耐性と、子どもの養育をめぐる親子関係との間に深いかわりのあることに気づいた。今後の課題として、このかわりの面に注目し、L, H両群の比較研究をすすめていきたい。

引用・参考文献

- 1) Rosenzweig, S : An outline of frustration theory. Chap. 11 in J. McV. Hunt(Ed) Personality and the Behavior Disorders, Vol.1 Ronald P. 1944.
- 2) 田中熊次郎：ソシオメトリーの理論と方法，142，明治図書(1967)
- 3) 高野清純他編：情緒障害事典，394，岩崎学術出版(1981)
- 4) 同上，395
- 5) 住田勝美他：PF-スタディ使用手引，10，三京房(1973)
- 6) 同上，154
- 7) 同上，159
- 8) 同上，159
- 9) 林 勝三他：親に対する子どもの認知像の検査法，25，牧野書房(1963)
- 10) 同上，8
- 11) 内山喜久雄監：児童臨床心理学事典，251，岩崎学術出版(1981)

この研究をすすめるに当たって，ご協力いただきました前岐阜大学附属小学校の堀井恕直先生そして各務原市立那加第一小学校に対し感謝の意を表します。